

VII-4

多発性骨髓腫に対する自家移植と自家/同種タンデム移植の比較検討

石川隆之、一戸辰夫、近藤忠一、高折晃史、門脇則光、堀 利行、内山 卓

京都大学医学研究科血液・腫瘍内科学

【目的】多発性骨髓腫に対する自家/同種タンデム移植の有用性を検討する【方法】対象は 2000 年から 2004 年に自家/同種タンデム移植を施行した多発性骨髓腫患者 5 名。本治療は臨床試験として施設内倫理審査委員会の承認を得た。自家移植後に PR 以上の治療効果が認められた 60 歳以下の患者で、HLA 一致同胞ドナーが得られた際には、文書による同意取得を前提として、自家移植後 6 ヶ月以内に同種ミニ移植を行なった。同種移植前に病状再燃を認めた例はなかった。同種移植の幹細胞源は 1 例で骨髓、4 例は末梢血。前処置はフルダラピン+メルファランが 1 例、フルダラピン+ブスルファン+低線量 (2Gy) TBI が 4 例。GVHD 予防は全例で FK506+MTX。同期間に施行した初回の自家移植により、PR 以上の効果を得た 60 歳以下の患者 9 名 (うち 7 名でタンデム自家移植施行) を比較対照とした。【結果】同種移植施行例 5 例中 5 例、自家移植群 9 例中 8 例生存中で、生存例の生存期間中央値はともに 50 ヶ月。同種移植後の再発は 24 ヶ月と 38 ヶ月後に 1 例ずつ認められたが、ともに病変は限局性で、再発後 9 ないし 13 ヶ月後に至る現在まで放射線治療とサリドマイドにより良好な全身状態が維持されている。自家移植群は 5 例で再発がみられた。【結論】自家移植奏効例に対して行なう同種移植は、重篤な移植関連併発症を伴う危険は低い。再発例においてサリドマイドの治療効果が得られていることは、同種移植後の維持療法としてのサリドマイドの有用性を示唆しており興味深い。